

博士論文（要約）

中世禅宗の儒学学習と科学知識

川 本 慎 自

## 目次

序章 中世の禅宗と儒学をめぐる研究状況	3
一 中世禅宗の二つのイメージ	3
二 中世禅宗と儒学	5
三 「興禅の方便」としての宋学	8
四 儒学講義の展開と抄物史料	10
五 本書の構成	15
第一部 禅僧の経済活動と知識形成	23
第一章 南北朝期における東班僧の転位と住持	25
はじめに	25
一 東谷圭照の転位と住持	26
二 東西両班の人事交流と詩文応酬	31
おわりに	33
第二章 室町期における東班衆の嗣法と継承	38
はじめに	38
一 東班僧の嗣法関係	39
二 東班僧の継続性と追善供養	42
三 東班僧の財産継承	48
おわりに	52
第三章 禅僧の荘園経営をめぐる知識形成と儒学学習	60
はじめに	60
一 雲章一慶の百丈清規講と荘園経営知識の伝達	62
二 儒学学習をめぐる禅僧と実務官人との交流	71
三 禅僧・清原氏の荘園経営をめぐる協同	75
おわりに	79

第二部 禅僧の儒学と足利学校 89

第一章 中世後期関東における儒学学習と禅宗 91

はじめに 91

一 資中の儒学講義と建長寺宝珠庵 92

二 宝珠庵をめぐる儒学学習と「常陸儒壇」 100

三 常陸における学問と足利学校 103

おわりに 109

第二章 足利学校と伊豆の禅宗寺院 119

はじめに 119

一 永享期の足利学校 120

二 宝珠庵門派と伊豆 122

三 足利学校と伊豆 126

おわりに 128

第三章 道庵曾頭の法系と関東禅林の学問 131

はじめに—「頭」の法系をめぐって 131

一 『千葉白井家譜』について 133

二 「道庵和尚伝」と白井氏 137

おわりに 139

第四章 足利学校の論語講義と連歌師 145

はじめに 145

一 『論語集解』と九華 147

二 足利学校と猪苗代家 149

三 大蟲宗岑と猪苗代家 154

おわりに 157

第三部 儒学に付随する科学知識 167

第一章 江西龍派の農業知識 169

はじめに一杜甫詩と大唐米 169

一 『杜詩統翠抄』の農業知識 171

二 江西龍派と歙喜寺・博士家 175

三 農業知識と現地情報 177

おわりに 179

第二章 月舟寿桂と東国の麦搗歌 187

はじめに 187

一 麦搗歌と鎌倉節 189

二 月舟寿桂と鎌倉禅林 191

三 月舟寿桂と足利学校周辺の人々 194

四 月舟寿桂と麦搗歌 197

おわりに 199

第三章 桃源瑞仙と武家故実の周縁 205

はじめに 205

一 『百衲襖』と経済上の知識 207

二 騒乱記述と漢学講義 210

三 武家の知識蓄積と共通性 213

おわりに 215

第四章 禅僧の数学知識と経済活動 221

はじめに 221

一 中巖円月の数学学習 222

二 数学知識の実用と発展 225

三 数学知識の継受と経済活動 233

おわりに 238

第五章 中世禅僧の数学認識 248

はじめに 248

一 算用状と起請 250

二 桃源瑞仙の周易講義と数学認識 256

三 数学認識と須弥山世界観 260

おわりに 265

終章 室町の文化から江戸の科学へ 273

初出一覧 285

あとがき 287

索引

本論文は、下記の図書としてすでに出版されており、全文をインターネットで公開することはできないため、書誌事項を記すことにより全文の公表に代えることとする。

川本慎自 『中世禅宗の儒学学習と科学知識』

思文閣出版 2021年1月

ISBN : 978-4-7842-2000-7

参考文献一覧（一部）

- 朝倉尚『禅林の文学—中国文学受容の様相』（清文堂出版、1985年）
- 朝倉尚『抄物の世界と禅林の文学』（清文堂出版、1996年）
- 朝倉尚『禅林の文学—詩会とその周辺』（清文堂出版、2004年）
- 朝倉尚『禅林の文学—戦乱をめぐる禅林の文芸』（清文堂出版、2020年）
- 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』（日本古典全集刊行会、1932年）
- 嵐嘉一『日本赤米考』（雄山閣出版、1974年）
- 伊藤幸司『中世日本の外交と禅宗』（吉川弘文館、2002年）
- 井上順理『本邦中世までにおける孟子受容史の研究』（風間書房、1972年）
- 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』（春秋社、1993年）
- 今泉淑夫『日本中世禅籍の研究』（吉川弘文館、2004年）
- 今泉淑夫『人物叢書 亀泉集証』（吉川弘文館、2012年）
- 今枝愛真『中世禅宗史の研究』東京大学出版会、1970年）
- 今谷明『室町幕府解体過程の研究』岩波書店、1985年）
- 入間田宣夫『百姓申状と起請文の世界—中世民衆の自立と連帯』（東京大学出版会、1986年）
- 岩山泰三『一休詩の周辺—漢文世界と中世禅林』（勉誠出版、2015年）
- 上田純一『九州中世禅宗史の研究』（文献出版、2000年）
- 上田純一『足利義満と禅宗』（法蔵館、2011年）
- 榎本涉『東アジア海域と日中交流』（吉川弘文館、2007年）
- 榎本涉『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社、2010年）
- 榎本涉『南宋・元代日中渡航僧伝記集成』（勉誠出版、2013年）
- 遠藤珠紀『中世朝廷の官司制度』（吉川弘文館、2011年）
- 大江文城『本邦儒学史論攷』（全国書房、1944年）
- 大塚光信『抄物きりしたん資料私注』（清文堂出版、1996年）
- 小川剛生『二条良基研究』（笠間書院、2005年）
- 小川正巳・猪谷富雄『赤米の博物誌』（大学教育出版、2008年）
- 蔭木英雄『中世禅林詩史』（笠間書院、1994年）
- 河内将芳『中世京都の民衆と社会』（思文閣出版、2000年）

川嶋将生『室町文化論考—文化史のなかの公武』(法政大学出版局、2008年)

川瀬一馬『日本書誌学之研究』(講談社、1943年)

川瀬一馬『五山版の研究』(ABAJ、1970年)

川瀬一馬『日本における書籍蒐蔵の歴史』(ペリかん社、1999年)

川瀬一馬『増補新訂 足利学校の研究』(吉川弘文館、2015年)

木下聡『室町幕府の外様衆と奉公衆』(同成社、2018年)

久須本文雄『日本中世禅林の儒学』(山喜房佛書林、1992年)

黒田日出男『日本中世開発史の研究』(校倉書房、1984年)

小助川元太『行巻編『塏囊鈔』の研究』(三弥井書店、2006年)

小林幸夫『説話と俳諧連歌の室町一歌と雑談の伝承世界』(三弥井書店、2016年)

斎藤夏来『禅宗官寺制度の研究』(吉川弘文館、2003年)

斎藤夏来『五山僧がつなぐ列島史』(名古屋大学出版会、2018年)

酒井茂幸『禁裏本と和歌御会』(新典社、2014年)

桜井英治『交換・権力・文化—ひとつの日本中世社会論』(みすず書房、2017年)

桜井景雄『南禅寺史』(大本山南禅寺、1940年)

佐藤進一『日本の中世国家』(岩波書店、1983年)

佐藤博信『続中世東国の支配構造』(思文閣出版、1996年)

山藤夏郎『〈他者〉としての古典—中世禅林詩学論攷』和泉書院、2015年)

清水克行『室町社会の騷擾と秩序』(吉川弘文館、2004年)

鈴木元『室町連環—中世日本の「知」と空間』(勉誠出版、2014年)

住吉朋彦『中世日本漢学の基礎研究 韻類篇』(汲古書院、2012年)

高橋智『室町時代古鈔本『論語集解』の研究』(汲古書院、2008年)

竹田和夫『五山と中世の社会』(同成社、2007年)

竹貫元勝『日本禅宗史研究』(雄山閣出版、1993年)

田中尚子『室町の学問と知の継承—移行期における正統への志向』(勉誠出版、2017年)

玉村竹二『日本禅宗史論集』上・下之一・下之二(思文閣出版、1976~81年)

中井裕子『室町時代の相国寺住持と塔頭』(相国寺教化活動委員会、2013年)

西尾賢隆『中世の日中交流と禅宗』(吉川弘文館、1999年)

西尾賢隆『中国近世における国家と禅宗』思文閣出版、2006年)

新田一郎『日本中世の社会と法—国制史的変容』(東京大学出版会、1995年)



祢津宗伸『中世地域社会と仏教文化』（法蔵館、2009年）  
芳賀幸四郎『中世禅林の学問および文学に関する研究』（日本学術振興会、1956年）  
原田正俊『日本中世の禅宗と社会』（吉川弘文館、1998年）  
東島誠『公共圏の歴史的創造—江湖の思想へ』（東京大学出版会、2000年）  
広瀬良弘『禅宗地方展開史の研究』（吉川弘文館、1988年）  
福嶋紀子『中世後期の在地社会と荘園制』（同成社、2011年）  
福谷彬『南宋道学の展開』（京都大学学術出版会、2019年）  
藤岡大拙『出雲学への軌跡』（今井書店、2013年）  
古川末喜『杜甫農業詩研究』（知泉書館、2008年）  
細川武稔『京都の寺社と室町幕府』（吉川弘文館、2010年）  
堀川貴司『五山文学研究』（笠間書院、2011年）  
堀川貴司『続五山文学研究』（笠間書院、2015年）  
峰岸純夫『中世社会の一揆と宗教』（東京大学出版会、2008年）  
宮紀子『モンゴル時代の「知」の東西』上・下（名古屋大学出版会、2018年）  
村井章介『アジアのなかの中世日本』（校倉書房、1988年）  
村井章介『日本中世の異文化接触』（東京大学出版会、2013年）  
村上雅孝『近世初期漢字文化の世界』（明治書院、1998年）  
矢内一磨『一休派の結衆と史的展開の研究』（思文閣出版、2010年）  
柳田征司『室町時代語資料としての抄物の研究』上・下（武蔵野書院、1998年）  
結城陸郎『足利学校の教育史的研究』（第一法規出版、1987年）  
芳澤元『日本中世社会と禅林文芸』（吉川弘文館、2017年）  
和島芳男『日本宋学史の研究 増補版』（吉川弘文館、1998年）

## 要旨

本論文の目的は、日本中世の社会と禅宗との関係をめぐる二つの見方、すなわち「思想・精神面で影響を与えた」点（「清冽な禅宗」イメージ）と「政治・経済に影響を与えた」という点（「経済の禅宗」イメージ）を整合的に理解することにある。これら二つの見方は、異なる時期や場面を切り取ったものではあるが、まぎれもなく同じ日本中世の禅宗の姿をどちらも正しく示している。しかし、そこから見えてくるものは大きくかけ離れており、論理的には相反する側面さえも持っている。近年、室町幕府の宗教政策研究や室町期の禅宗美術・五山文化研究は大きな進展を見せているが、幕府政治史の側からの禅宗への言及と、美術史・文化史の側からの禅宗への言及は必ずしも連関せず、個別に検討が加えられることが多い。そこで、学問史・技術史という視角を用いることによって、美術制作や政治経済活動を支える知識・技術の源泉を明らかにし、これらを架橋しようとするものである。

そのために、本論文では、禅宗寺院のなかで教学面を担当する西班衆禅僧のみならず、経営面を担当する東班衆禅僧のもっていた知識・技術に着目し、それが禅宗寺院における学問（とくに儒学学習とそれに付随するもの）と密接に関わっていたことを明らかにする。これによって、中世社会において禅宗寺院の果たした役割の全体を明らかにするとともに、近世につながる科学意識の萌芽についても見通すものである。

具体的な構成は以下のとおりである。

序章「中世の禅宗と儒学をめぐる研究状況」では、禅宗史研究の研究状況を概観した上で、禅宗寺院および禅文化をめぐる思想文化面と政治経済面の二つの対照的な研究動向、すなわち「思想・学問の面で高い精神性を持ち文化に影響を与えた宗教」という見方と「鎌倉・室町幕府と結びつき政治・経済の面で社会を動かした宗教」という見方が互いに連環のないまま蓄積されていることを指摘して、その二つを架橋する方法として学問史的手法の有効性を挙げる。そしてとくに禅宗寺院における儒学学習に着目し、その研究状況を具体的に概観する。

第一部「禅僧の経済活動と知識形成」は、東班衆について、とくに日本中世における実態と推移を検討する。中国禅から受容した「生活即修行」という思想を反映して、学問を担当する西班衆と経営を担当する東班衆は対等と位置付けられているが、日本中世においては西班衆と東班衆の僧は固定化しておらず、互いに転位することがしばしばあ

ることを明らかにする。そして室町期に至って、東班衆の間で継承される塔頭が出現して「東班衆の法系」として固定化していく。このことは、荘園経営をはじめとする経済活動に用いられる知識（年貢徴収の方法や守護との関係構築など）が師資の間で受け継がれ、特化して高度化していくことにつながるが、一方で東班衆と西班衆が対等であるという経緯から、禅宗寺院において行われた儒学系の学問の場にも東班衆は関与することが可能となる。禅宗寺院内の講義の口述記録である「抄物」の記述の検討から、こうした寺院内の講義では、いわゆる儒学の講義にとどまることなく、荘園経営の実際の現場における知識が伝授されていることを明らかにし、儒学講義の場において経済知識が培われていると結論づける。

第二部「禅僧の儒学と足利学校」では、これらの儒学学習の場がどのように成立し、どのような実態を持っていたかという点について、足利学校を中心とする東国を例として取り上げて考察する。学問所としての足利学校が実質的に成立するのは応永年間の関東管領上杉憲実による整備以降であるとされるが、それ以前の南北朝期の関東禅林においても、とくに常陸正宗寺を中心とする儒学学習が盛んに行われており、書籍の移動状況などを考察することにより、常陸正宗寺・鎌倉建長寺・伊豆修禅寺を結ぶ儒学の人的・物的交流が足利学校成立以前から形成され、それが足利学校における儒学学習につながってくることを考察する。また足利学校における儒学学習の具体的な例として、戦国期の『論語』講義のなかに鎌倉公方・古河公方の故実にかかわる知識が散見していることに注目し、猪苗代兼載ら連歌師と足利学校との間の関係を指摘して知識が形成される様相を明らかにする。

第三部「儒学に付随する科学知識」では、再び視点を京都に戻し、五山禅林における儒学や漢学学習のなかに、寺院経営・経済活動や政権との関わりに資するような知識が含まれることを具体的に考察する。事例としては、室町期の禅僧江西龍派による杜甫詩講義には赤米や湿田耕作などの農業に関わる知識が含まれ、戦国期の禅僧月舟寿桂による『三体詩』講義には東国の農事歌に関する知識、同じく戦国期の禅僧桃源瑞仙の『周易』講義には室町幕府の「国役」（守護出銭）の金額算定に関する知識が含まれていることなどを取り上げる。これらの背景には禅僧の周辺に公家・武家など様々な階層との人脈が形成されているということがあり、儒学（広義の漢学も含む）講義を互いに聴講することを通じて知識が形成され、さらにはこれらの聴衆の関心が講義内容にも影響することによって、講義自体に具体的な実用的知識を含むようになってゆくことを明らかに

する。さらに、桃源瑞仙の『周易』講義には算木を用いた計算技術の知識が含まれており、それが禅宗寺院の金融経営や土倉角倉家の経営とも関わっていくことを明らかにし、またなぜ禅僧がそうした計算技術を持つことができたかという思想的背景についても、東班衆の動向と関連させて考察する。

終章「室町の文化から江戸の科学へ」では、これら三部にわたって考察してきた内容を総括し、禅宗寺院において蓄積された実用的知識が、江戸初期の科学技術の基礎となってゆく様相を展望する。とくに禅宗寺院内における東班衆の位置づけの高さが中国禅の思想に起因することと、それが禅宗寺院における実用的知識の尊重につながったことを指摘し、そうした思想と知識が公家や戦国大名に広がることで、たとえば直江兼続や徳川家康らの学問（とくに医学知識）につながることを明らかにする。これらの検討により、冒頭に掲げた中世禅宗の思想的な側面と経済的な側面の齟齬については、中国禅から日本禅宗が継受した思想である「生活即修行」という概念のもとに整合的に理解できることを位置付ける。

以上のように、本論文は、中世禅宗について、学問史的手法をもちいて、とくに儒学学習とそれに付随する科学知識を検討することによって、中世社会におけるその位置づけを明らかにしたものである。